防災・減災のページ

3・11 家族と向き合う

「自分たちの命は自分たちで守る」。この防災の基本を身に付けるには、教育を含め、家庭の果たす役割がとても大きい。震災から2度目のお正月。多くの人々が犠牲になった東日本大震災をあらためて振り返り、家族の防災対策を考え直すきっかけにしたい。家庭の事情に合わせて災害に備える2組の家族を紹介する。専門家には、家庭でできる防災のチェック項目を挙げてもらった。

わが防災減災こと

車いす欠かせない石森さんの場合

東松島

避難

1人で無理をしない　遠慮せず周りに助けを求める

約束事 心刻む

東松島市矢本に住む石森祐介さん（27）は脳性まひのため手足に障害があり、移動には電動車いすが欠かせない。

海から約2キロの皇子付近は高台やビルもない。在宅時に津波の危険がある場合は、内陸に向かって約2キロの公民館に家族の運転する車で避難しようと考えていた。

「この選択はあまり追まないから、いざという時に使えない」

「アンダーパス（立体交差の掘り下げ式の道路）は嫌。震災の時にすぐ水がたまったからね」

屋根で地図を広げ、祐介さんと父信一さん（60）、母恵子さん（54）が避難経路を確かめる。

交通量の多い道はできるだけ避けるつもりだが、渋滞に巻き込まれる恐れはある。「ちゅうちょしないで逃げるかない」と恵子さん。信一さんは「本来は祐介のように必要とする人が、車で優先避難できる枠組みがあればいい」と組う。

震災当日、津波は静かに石森さんの宅に迫ってきた。川のせせらぎのような水音に気付いた恵子さんが外を見た時は遅かった。「2階へ逃げて！」息子に叫んだ。

祐介さんはゆっくりだが自分で歩ける。1段、1段、差の掘り下げ式の道路は嫌。震災の時にすぐ水がたまったからね」

屋根で地図を広げ、祐介さんと父信一さん（60）、母恵子さん（54）が避難経路を確かめる。

交通量の多い道はできるだけ避けるつもりだが、渋滞に巻き込まれる恐れはある。「ちゅうちょしないで逃げるかない」と恵子さん。信一さんは「本来は祐介のように必要とする人が、車で優先避難できる枠組みがあればいい」と組う。

震災当日、津波は静かに石森さんの宅に迫ってきた。川のせせらぎのような水音に気付いた恵子さんが外を見た時は遅かった。「2階へ逃げて！」息子に叫んだ。

祐介さんはゆっくりだが自分で歩ける。1段、1段、後に1階は水没した。「階段は何年も使っていなかったけど、火事場のばか力で上りきった。車いすだった恵子さんも60、母恵子さんが助かるかかった」

内閣府などの調査では、津波被害を受けた東北3県の犯罪部で障害者の死亡率は約2倍。全体の死亡率の2倍と推定される。一人暮らしや家族が在宅の在宅障害者の中には、助けてくれる人がいなくて命を落とした例も少なくない。

祐介さんは震災を機に設立された「被災地盤い者センター仙台」で、障害者の自立支援に関わる。JR仙台駅を使って石巻市の事務所に通い、視察や講演で各地を飛び回る。「自頃から障害をオープンにして、周囲に自分の存在を知ってもらうことと、備えの一歩になる」と話している。

災害時、いつも家族が近くにいるとは限らない。石森家のある立地区は住民のつながりが強く、両親はいざというときに祐介さんの避難に力を貸してくれる。

「一人で無理をしない」「遠慮しない」で周りに助けを求める。家族の約束事。

親子で自宅周辺の安全を確かめる（左から）石森恵子さん、祐介さん、信一さん　＝東松島市矢本

確認手段 幾重にも

宮城・村田

安否

連絡取り合えれば、他の人サポートへ

病院職員 森さんの場合

宮城県村田町の病院職員森利秋さん（59）は東日本大震災の1カ月後、家族の携帯電話の番号を記した名刺を大の「連絡先カード」を作った。折れたり汚れたりしないようラミネート加工し、子ども4人のうち携帯電話を持たない翌子の次女（14）と三女（11）に持たせている。

母（84）と妻（45）、いずれも大学生で仙台市に住む長男21）と長女19）、双子の7人家族。以前から家族に対する携帯電話は通じず、家族と連絡が取れなかった。

規模が大きい災害ほど、その後の安否確認が重要だと痛感した。自宅の固定電話の番号なら簡単に覚えられるが、家族全員の携帯電話の番号を記憶するのは大変だ。気が動じたら、思い出せると限らない。そこで思いついたのが、カードの作成だった。

森さんは「災害や事故の際、公衆電話や他人の携帯電話で誰かに連絡すれば、家族みんなで情報を共有できる。ラミネート加工した紙なら電池切れの心配がないし、水にも強い」と説明する。

それでも、大震災のような広域的な大規模災害が起きると、携帯電話そのものが使えなくなる可能性が高い。

次に考えたのが携帯電話以外の通信手段だ。10年以上前、妻と仕通の運動だったアマチュア無線に目を付けた。

免許を更新し、自宅と車に無線機を置いた。ハンディ型も持ち歩いている。電波の中継局を使えば、病院と自宅の間で交信できるという。

森さんは「災害時に家族同士が連絡を取り合うことができれば、家の復旧や仕事に向かえる。他の人へのサポートも可能になる」と話す。

通信手段の確保の他にも、ガソリンの携行缶や懐中電灯を貯い足すなど、家庭内の防災意識は高まっているという。

自作の「連絡先カード」を手にする森さん